グッときょうかん！

「子どもを共に育む京都市民憲章」作文・エッセー

受賞作品

＜市長賞＞

「娘から学ぶこと」　　奥田留美子さん（京都市上京区）

＜きょうかん賞＞　（氏名五十音順）

「子どもとふれあう幸せ」　岩田　薫さん（京都市伏見区）

「夢を手にして」　　大畑楽歩さん（京都市上京区）

「子どもと過ごす時間」　　武田寿子さん（京都市左京区）

「どんなときでもあなたの味方」玉岡信子さん（京都市右京区）

「絵本との出会い」　　西田智子さん（京都市右京区）

京都市保健福祉局子育て支援部児童家庭課
京都市教育委員会事務局生涯学習部家庭地域教育支援担当

市長賞

「娘から学ぶこと」

奥田　留美子さん（京都市上京区）

私は，四月から小学生になった知的障害の娘と一緒にバス通学をしています。二年生になったら一人で登校できる事を目標に，四月に誕生した長男を抱っこしながら毎日三人で頑張っています。そんな娘が，12 月から突然「一人でバス乗れるし！一人で行く！」と頼もしくも，驚きの一声。ランリュックをさっそうと背負い「いってきます！」と出て行く娘を急いで支度し追いかけました。バス停までは大人の足で５分程，娘は 10 分弱かかります。大通りの信号のある交差点の横断歩道を渡ったいつものバス停に，一人バスを待っている娘の姿に感動と動揺を隠せない私。一瞬悩みましたが，その間にいつものバスが到着し，娘は迷うことなく一人で乗って行きました。心臓がバクバクする中，急いでタクシーに乗り先回りして，降りるバス停で娘を待ちました。同じ学校に通学するいつものメンバーのお友達と一緒に無事おりてきました。娘の誇らしげな自信に満ちた表情は，また一歩成長し，私から離れていく姿でもありました。体中の緊張が一気にとけ，気付くと涙で顔がぐちゃぐちゃでした。嬉しいやら，心配やら，でもやはり喜び・・・言葉にできない心境でした。

その日から付添いではなく，追跡登校の始まりでした。初めの頃，お友達が「お母さんは？」と娘にきき私を探している様でしたが，何日かすると“一人通学しているんだ”と，察してくれたと思われ遠くで見ていても娘をきにかけ優しく接してくれている様子がわかり，本当に嬉しく思いました。毎朝，各所で会う大人の方々も『一人で学校いくのね。えらいね。気をつけていってらっしゃい。』か何か，声をかけて下さっている様子がわかります。他にも見守って下さっている方々が娘の行く先々には，たくさんおられることを改めて知り，感謝の気持ちで一杯になりました。

独身の頃には気付かなかった地域との関わりの大切さを我が子を通して教わる日々です。付き添いバス通学中，長男を抱っこしていた私に，席をゆずって下さる心優しい方々にたくさん出逢いました。そのバスには視覚障害者の方も乗車されており，席をゆずったりはもちろんのこと降りられる時のお手伝い（通路を開けてくれるように声をかけたり，出口まで誘導したり・・・等）を率先してされている女性には頭の下る思いでした。時にはどなたも席をゆずって差し上げる様子がない時もありました。長男を抱っこしている私が席を立つことの方が迷惑ではないかという葛藤の中，いてもたってもいられず，席をゆずり座って頂くこともありました。それを見ていた小学生の子供さんが私に席をゆずってくれました。子供達は大人の様子を見て学んでいるのだと関心しました。

言葉で教えるのは簡単ですが，実践にうつすのは難しいものです。しかし，子供達は大人の実践を見ていろいろと感じとっているのだと思いました。いつか娘も，そういう判断力がつき実践することが出来たらいいなあと願っています。子供達は皆，ピュアな心を持っています。その心を優しくのびやかに育てるのは親だけではなく，周囲の大人全てが影響するのだと感じました。娘とのバス通学という貴重な経験を通して，私自身いろんな事を学ぶことができ感謝しています。「育児」は「育自」という様に，自分自身を育てる事，子供に育てられている事を実感する日々です。これから先も，多くの壁はやってきます。しかし，必ず乗り越えられると信じ，娘の成長を，娘のペースで共に楽しんでいきたいと思います。

きょうかん賞

「子どもとふれあう幸せ」

岩田　薫さん（京都市伏見区）

子どもをまもり育てるのは，地域住民の役割でもあると考え，「子ども見まもり隊」を志願し，登下校時の安全安心を願い，交差点に立っていつの間にか 6 年が経過した。

はじめは，私服のまま「お早うございます！」と朝の挨拶を交わしても，子育てから解放されて久しく，子ども達や保護者とのつながりも薄く，戸惑うことの多い毎日でした。そうした中で毎日「根気との戦い」で少しずつ挨拶が返ってくるようになり，明日への励みとなった。

子供達の通う小学校は，各学年 1 クラスと小規模校です。

町別の登校班は，6 年生のリーダーを先頭に流れるように通り過ぎる中，一人ひとりの目線に合わせて「お早うございます！」と声をかける。

ある日，先頭が急いだので続いて走ろうとした低学年の女子が転倒，額のかすり傷に血が滲み，怖さも手伝って目を潤ませた。

私は近寄り思わず「大丈夫よ」と言いながら抱きしめると，温かみが伝わり少し安心したのか泣き止みホッとした。友達に先生のところまで同行と連絡をお願いした。

この小さな出会いが心をつなぐきっかけとなり，今朝も笑顔で登校，「痛みを気遣う」と，うなずいていた。

また，春に転校してきた高学年の男子は，声をかけても足元を見ながら通り過ぎた，「照れくさい」のかもしれないが，夏休み後やっと小声で顔を見ながら，「お早うございます」と言葉を返してくれた時は，思わず感動した。

子どもを取り巻く事件が多い世相の中で，日々交差点で子どもの安全を守れる事に感謝し，今では子ども達の笑顔が私の宝物になりました。

これからも「朝のふれあい」が続けられるように思い，夫婦で立っています。

きょうかん賞

「夢を手にして」

大畑　楽歩さん（京都市上京区）

私は小さい頃から「お母さん」になれることを，ずーっと夢見続けてきた。
私にとってそれは果てしなく大きな夢だった。
「えっ？お母さんになることが？」と思われるかもしれないが，脳性麻痺というハンディを背負っている私にとっては，オリンピックで金メダルをとりたいねん！と言ってスイミングを習いはじめる無邪気な子どもの言うことと変わりないぐらい，いや，もしかしたら，その子が将来オリンピックという大舞台で金メダルを取る可能性の方が勝るかもしれない程に，私が母になりたいという夢は，遠く儚いものだった。
夢が夢で終わるか否かは，神の力でもなく，夢の大きさによるものでも，努力の差違でもないと私は思うのです。ただただ，どれだけ深く大事にその夢を持ち続けられるかどうかにあるのだと。もちろんかなえる為に惜しみない努力や，時には運（神の力）も大きく左右されるのでしょうが，「夢」をいつも大切に自分の傍らに置いておくことで，自然と努力もできるでしょうし，チャンスも逃さずキャッチできるアンテナを立てておくことができるのではないでしょうか？
私はアテトーゼ型の脳性麻痺者ですが，家の中での身の回りのことは，ゆっくりと時間をかければ大抵のことは自力でできます。また家の中では車椅子や装具を使わずに歩くこともできます。ただ，公共機関を使って一人で出かけることや，歩いてどこかへ行くことは，無理なことですし，介助者と一緒であっても，車椅子というアイテム無しでは難しいでしょう。それ故，社会人として働くことは，もっと沢山のハードルがあり，父の勤める会社で事務のアルバイトとして雇ってもらっていましたが，親が死んだら，私はどうやって生きていけばいいのだろうという不安を常に抱えていました。そういう意味合いにおいて自立出来ていなかった私が，今こうして人並みの家庭を持っていられて，母でいられる幸せを“奇跡”という言葉で語るしかなくなってしまうからです。確かに“奇跡”なのかもしれません。でも，周りから，ときに親にまでも「あなたに結婚は無理だって」って言われ続けても，私は自分の夢を捨てきれず，大切にいつもそばに置いて「私にだってできるはず！チャンスは必ず訪れる！」と思い続けていたからこそ，今の幸せがあるのだと私は信じているのです。
息子が生まれてからはや 7 年。私の母暦も 8 年目を迎えました。
息子は今 1 年生で，新町小学校に通っています。家から学校まで約 10 分の距離で，8 時 20 分に出たら悠々，間に合う近さだというのに，学校が，お友だちと

遊ぶのが大好きな息子は，7 時 40 分には家を出て行ってしまいます。放課後は学校で残り遊びを楽しむか，4 ～5 人のお友だちを招いて家で遊ぶかのどちらかです。
息子が通う新町小学校は，公立小学校だというのにバリアフリーが行き届いています。玄関にスロープがあるのはもちろんのこと，身障者トイレは各階に，そして館内にはエレベーターまで完備されているので，息子の参観日はもちろん，レクリエーションなど様々な行事にも躊躇せずに，電動車椅子で行くことができます。なので，息子のクラスメイトの子は，私のしゃべり方が聞き取りにくくても，家に遊びに来た時に，初めて私の歩く姿を目にしても然程，驚くことなく接してくれるのが私にとって，とても嬉しいことです。ゲームもそっちのけで，じーっと私の動きを観察する子，全く他の「お母さん」と変わらず普通に接してくれる子，「なんで，そんなに声でーへんの？首でも痛いん？」と単刀直入に聞いてくる子，私がしゃべる言葉をちゃんと聞きとらなきゃ！と神経を集中させて緊張の面持ちで耳を傾けてくれる子，と子どもによって実に様々ですが，どの子も皆，私のことを馬鹿にしたり，気持ちわるがったりせず，「大畑くんのお母さん」として親しみを持って接してくれるのが驚きであり，なんとも言葉では言い難い満たされた気持ちにしてくれるのです。
社会貢献というところから程遠い場所で生きてきた私でしたが，こうして息子を通して他の子ども達とも関われることが，近頃の私の楽しみであり，放課後にベストコンディションで子ども達を迎えることができるように，体調を整えながら，主婦業にも励み，二次障害なんかに負けない体力づくりもあせらず，怠らず，日々，精一杯，今日もまた家族と共に明日へとつなげていきたい。

きょうかん賞

「子どもと過ごす時間」

武田　寿子さん（京都市左京区）

子どもというのは，見ているだけでとても楽しい存在です。ウルトラマンになりきって見えない怪獣と戦っている姿。つたない手で箸を持ち，ご飯をほおばるまあるい顔。この子のために私はいったい何ができるだろう？。そんなふうに子どもをながめているうちに，ふと気づいたことがあります。子どもはその都度必要なものを要求しながら自ずから成長していくのではないか，ということに。

考えてみれば，赤ちゃんの頃からおなかが減ったといっては泣き，眠いと言っては泣くことで自分に必要なものをこちらに要求してきたのです。それはまず生命を維持するうえでとても重要な要求でした。それと同じように，社会的な存在として成長するために，自ずから必要な何ごとかを私たちに要求してきているように思ったのです。

たとえば，いっしょに散歩しているといろいろな働く人たちを目にします。小さな子どもにとってはどれも興味津々。それがどういう職業で，この社会にとってどんな意味を持っているのか，説明するのも大変でした。でも，「どんなお仕事したい？」と聞いて返ってくる子どもの答えには意外な楽しみがありました。

そのうち「お母さんは何になってほしいの？」と聞いてくるようになりました。ちょっと思考が行き詰まってきたのだろうか？そこで私は一つの条件を出しました。「人を幸せにしてあげられる仕事，あとは自分で考えて，何でもいいよ」それから彼の基準は「人を幸せにしてあげられるかどうか」になりました。しかしここで一つ課題ができたのです。「自分の好きなことが人の幸せにつながるかどうか」です。自分が関心を向けるものが，どんなふうに人々の営みに関わっているのか，一生懸命考えているうちに，彼の興味は多方面に広がってきました。国の働きや，経済の動き，社会の矛盾や死生観についてまでも。そして，各々別々に起こっているように見える事象が，実はそれぞれ有機的に結びついて起こっていることに気づき，自分なりの考えを解説してくれることもあります。

子どもに何を教えよう，何を与えてやればいいのだろうか？それはけだし愚問であって，ただそのときの要求に応じて，一緒に悩み，問いかけ，そしてあらぬ方向へ流れていかないようにだけ気を付けてやればいいのではないかと思います。

いつかこの子も「お母さん，お母さん」といってまとわりついてはくれなくなるでしょう。その時まで，ゆっくり子どもとの時間を楽しんでいようと思っています。

きょうかん賞

「どんなときでもあなたの味方」

玉岡　信子さん（京都市右京区）

子供の幸せとはなんだろう。
いい学校に入り有名な会社に就職することだろうか。私はそれよりも「自分は大切に思われている。」と実感することではないかと思う。

今，私たち親に必要なことは「勉強しなさい。」と子供をせきたてることではなく，ただだまって見守ってやることだと思う。信頼されていれば子供は責任ある行動をとるようになる。押しつけがなければ子供の向上心は育ち勉強もおのずと伸びて行く。

親がテレビを消し読書をすればごく自然に家庭はそのようになる。テレビのない食卓で命の大切さ，人として大事なこと，平和のありがたさ，世界に目を向ける必要性などその折々に親子で語り合うことができる。
団欒の会話の中で子供は心のバランス感覚を身につけて行くのだろう。そうして携帯電話やインターネットに限らずこれから出会うどんな事柄に対しても節度ある態度が取れるようになるのではないだろうか。

私が子供に伝えたいメッセージは「なにがあってもお母さんはあなたの味方。」その一言に尽きる。子供は失敗もするしまちがうこともあるだろう。その失敗やまちがいを肯定するのではなく一緒にあやまること，共に償うことをも含めどんなときでも子供の味方でありたいと思う。

自分を大切に思ってくれる人がいること。そのことを確信できれば子供の心はまっすぐ強く育つのだと信じている。

きょうかん賞

「絵本との出会い」

西田　智子さん（京都市右京区）

気がつけば七歳の娘と五歳の息子の母親である私。無我夢中の毎日で失敗と反省の繰り返し。これでいいのかと思うが本当にこれが精一杯なのである。しかし，こんな私でも子どもたちにし続けていることを，一つだけ見つけたのである。

今から四年前，八ヶ月の息子と三歳の娘を連れて息子の八ヶ月健診に保健所へ行った。人見知りの激しい娘は私にピッタリとくっついている。最後に行った部屋では何人かが絵本の読み聞かせをされていた。私にピッタリとくっついていた娘が私から離れ，輪の中に入っていった。驚いて立ち尽くしているとその中の一人が「図書館に行かれてますか？」と訪ねてこられた。正直なところ場所さえ知らないし絵本をおもちゃのように扱うので図書館の本を利用するのは申し訳ないと伝えた。すると「本の破損は気にしないで。こんなに興味を持たれているので一度立ち寄ってください。」と言われた。

とりあえず図書館に行ってみると，私が子どもの頃に読んだ本が沢山あった。まず，それを借り・・・そのうち子どもたちも自分で本を選ぶようになった。同じ本を選んできても何度も読み聞かせをした。興味があれば予約して借りた。気がつけば子どもたち・・・というより私自身に読み聞かせをしていた。子どもたちを怒った後でも読み聞かせをすると心が落ち着いてくる。しぼんだ心に夢を与えてくれる読み聞かせは私の励みになっていた。図書館でも泣いたりわめいたりする子どもたちを連れて行くのは大変だった。しかし図書館の方々がなだめて下さったり，私に励まして下さったり・・・。とても親切にしていただいたおかげで図書館通いを続けられたといっても過言ではない。

“本を読めば賢くなる”という言葉を少し期待していたが，小学校一年生の娘は誤字が多い。しかし，国語の教科書のさし絵を見て，「“ももんちゃん”と一緒の絵や。」と言ったのである。“ももんちゃん”の絵本をよく読んでいたのだが，“ももんちゃん”の絵でなくても同じ作者だと分かったのだ。直接国語力につながっていなくても教科書に親しみを持ってくれたなら，もうそれだけで充分である。

これからも子どもたちは，どんどん成長していく。その中で大きな壁にぶち当たる時もあるだろう。その時，心の奥で眠っていた絵本のワンフレーズが子どもたちの支えや励ましになることを，私は切実に願っている。

京都市では，「子どもを共に育む京都市民憲章普及促進協調期間」（平成２０年１０月２５日～１２月２０日）における取組の一環として，市民との「共汗」で本憲章の実践を一層推進するため，保護者や地域の方々が，日頃の「子育て」や「子どもとの関わり」の中で実践している取組，またその取組を通して感じていることや子どもたちの未来に残したい思い等を作文やエッセーとして募集しました。

応募いただいた４２作品の中から，選考の結果，６作品を受賞作品に決定しました。

＜参考＞

１　募集概要

〇募集内容：日頃の「子育て」や「子どもとの関わり」の中で実践している取組，またその取組を通して感じていることや子どもたちの未来に残したい思い等を綴った作文やエッセー（概ね２００～　８００字程度）。

〇募集期間：平成２０年１０月２５日（土）～１２月２２日（月）

〇応募資格：京都市内に居住，在勤又は在学の方

２　応募数

総数：４２作品

３　選考方法

「京都子どもネットワーク連絡会議」，「人づくり２１世紀委員会」及び「子どもを共に育む京都市民憲章普及促進部会」の各代表者からなる選考委員によって選考。

子どもを共に育む京都市民憲章

わたくしたちは，

1　子どもの存在を尊重し，かけがえのない命を守ります。

1　子どもから信頼され，模範となる行動に努めます。

1　子どもを育む喜びを感じ，親も育ち学べる取組を進めます。

1　子どもが安らぎ育つ，家庭の生活習慣と家族の絆（きずな）を大切にします。

1　子どもを見守り，人と人が支え合う地域のつながりを広げます。

1　子どもを育む自然の恵みを大切にし，社会の環境づくりを優先します。

平成 19 年 2 月　5 日（育児ニコニコ笑顔の日）制定

3 月 13 日　京都市会が憲章を積極的に推進する決議